▼四谷怪談（前後篇十三卷）

帝キネ芦屋時代映畫

脚色者　上島量氏
監督者　佐藤樹一路氏
撮影者　三木茂氏

――主要役割――

民谷伊右衞門　明石緑郎氏
お岩　松枝鶴子孃
下男小平　大野三郎氏
お岩の父左門　實川延笑氏
同弟與之助　中村小福氏
伊藤喜兵衞　市川幄十郎氏
娘お梅　南愛子孃
仲間直助　東良之助氏
秋山長兵衞　片桐恒男氏

〔略筋省略〕

南北の「四谷怪談」を努めて簡略に書き換へた上島量氏の脚色振りは商品映畫さしてはマキノの趣味的なのより遙かに有利であるし一般觀客も伏せ字だらけの樣なマキノのよりやはりこうした解りやすい方が納得が出きて良いだらう小平が宅悦の役まで引受けたり　お梅がお袖を代表して直助にからむなどさ云ふ珍な脚色も亦一興であつた。佐藤樹一路氏の監督は前半は映畫的に後半をウントお芝居に扱つた所は要領が良い　殊に映畫的の部に屬する前半の幻想から浪宅までは上手に運んで居て見心地が好かつた後半の怪談は別に新味はないが相當の凄味を出して居た。手法では髪すきに於るお岩の見せ方と佛壇に猫を使つたのが最も効果があつた。隠亡堀は至つて貧弱で倒底マキノにはかなわなかつた。蛇山は思切つてのお芝居で大ドロで引張の見得宜しくと云ふ所を充分見せて呉れたのは聊か顔負けであつたラストの敵討はマキノ以上にお芝居式で頗る呆氣ないが全體から見たら佐藤氏近來の力作さ云へるだらう。明石緑郎氏の伊右衞門は脚色か既に南北の描いた伊右衞門とは可成り隔りがある以上氏の伊右衞門が南北の伊右衞門にならないのは止むを得ない事だが氏の演技は月形氏に對しても大して遜色のない出來榮えを見せて居たと云へよう。松枝鶴子孃のお岩はマキノより生かしてあるとは云へ鈴木すみ子孃よりやはり適役である事を立派に證據立たして居る。幻想　現はれる娘時代と新婚時代を巧みに演分けて居るのや浪宅に於る痛々しい演技などはさすがに巧い扮裝も除々に變化を見せたのは自然で好かつた。中村小福氏の與之助は云ふまでもなく與茂七の穴を埋め役が、與茂七ほど好い役になつて居ないので氣の毒であつた　片桐恒男氏の秋山は端敵に成り切つて居るのが感心であつた　撮影　帝キネ式で餘りよくないが後半のトリツクの個所より寧ろ前半の方が難がなかつた。

――山本緑葉――

興行價値 ―恐、もの見たさの群衆心理はこうした映畫の價値を自然に高めて居る。マキノに先手を打たれたが大して影響はあるまい。前後篇同時公開の興行政策も成功して居る（八月廿日東京大勝舘　大阪芦邊劇場　神戸相生座　京都キネマ倶樂部その他一齋封切）